

家霊

岡本かの子

青空文庫

山の手の高台で電車の交叉点になっている十字路がある。十字路の間からまた一筋細く岐わかれ出て下町への谷に向く坂道がある。坂道の途中に八幡宮の境けいだい内と向い合つて名物のどじよう店がある。拭き磨いた千本格子の真中に入口を開けて古い暖簾のれんが懸けてある。暖簾にはお家流の文字で白く「いのち」と染め出してある。どじよう、鯰なます、鱈つぼん、河豚ふぐ、夏はさらし鯨くじら——この種の食品は身体の精分になるということから、昔この店の創始者が素晴らしい思い付きの積りで店名を「いのち」とつけた。その当時はそれも目新らしかったのだろうが、中程の数十年間は極めて凡庸な文字になって誰も興味をひくものはない。ただそれ等の食品に就つてこ

の店は独特な料理方をするのと、値段が安い^{やす}のことで客はいつも絶えなかつた。

今から四五年まえである。「いのち」という文字には何か不安に対する魅力や虚無から出立する冒険や、黎明^{れいめい}に対しての執^{しつよ}拗^うな追求性——こういったものと結び付けて考える浪漫的な時代があつた。そこでこの店頭せうたんの洗い晒^{さら}された暖簾あかぢの文字も何十年来の煤すすを払って、界限^{かいわい}の現代青年に何か即興しつじやう的てきにもしろ、一つのシヨックを与えるようになった。彼等は店の前へ来ると、暖簾の文字を眺めて青年風の沈鬱しんいつさで言う。

「疲れた。一つのちでも喰うかな」

すると連れはやや捌さばけた風で

「逆に喰われるなよ」

互に肩を叩いたりして中へ犇^{ひし}めき入った。

客席は広い一つの座敷である。冷たい籐^{とう}の畳の上へ細長い板を
柵^{ますがた}形に敷渡し、これが食台になっている。

客は上へあがつて坐つたり、土間の椅子に腰かけたりしたまま、
食台で酒食している。客の向っている食品は鍋るいや椀が多い。

湯気や煙で煤けたまわりを雇人の手が届く背丈だけ雑巾をか
けると見え、板壁の下から半分ほど銅のように赭^{あか}く光っている。

それから上、天井へかけてはただ黒く竈^{かまど}の中のようにである。この
室内に向けて昼も剥き出しのシャンデリアが煌^{こうこう}々と照らしてい
る。その漂白性の光はこの座敷を洞窟のように見せる許^{ばか}りでなく、

光は客が箸はしで口からしごく肴さかなの骨に当たると、それを白の枝珊瑚さんごに見せたり、堆うずたかい皿ねぎの葱の白味に当たると玉質のものに燦きらめかしたりする。そのことがまた却かえつて満座を餓鬼の饗宴染みて見せる。一つは客たちの食品に対する食べ方が亀屈かじかんで、何か秘密な食品に噛みつくといった様子があるせいかも知れない。

板壁の一方には中くらいの窓があつて棚が出ている。客の詭あつらえた食品は料理場からここへ差出されるのを給仕の小女は客へ運ぶ。客からとつた勘定もここへ載せる。それ等を見張つたり受取るために窓の内側に斜めに帳場格子を控えて永らく女主人の母親の白い顔が見えた。今は娘のくめ子の小麦色の顔が見える。くめ子は小女の給仕振りや客席の様子を監督するために、ときどき窓から

覗く。すると学生たちは奇妙な声を立てる。くめ子は苦笑して小女に

「うるさいから薬味でも沢たくさん山持つてつて宛てがつておやりよ」と命ずる。

葱を刻んだのを、薬味箱に誇大に盛つたのを可笑おかしさを堪こらえた顔の小女が学生たちの席へ運ぶと、学生たちは娘への影響があった証拠を、この揮発性の野菜の堆さに見て、勝利を感じる歓呼を挙げる。

くめ子は七八ヶ月ほど前からこの店に帰り病気の母親に代つてこの帳場格子に坐りはじめた。くめ子は女学校へ通っているうちから、この洞窟のような家は嫌で嫌で仕方がなかった。人世の老ろ

うもう
耄者、精力の消費者の食餌療法をするような家の職業には堪えられなかった。

何で人はあかも衰えというものを極度に惧おそれるのだろうか。衰えたら衰えたままではないか。人を押付けがましいにおいを立て、脂がぎろぎろ光って浮く精力なんというものほど下品なものはない。くめ子は初夏しの椎いの若葉の匂いを嗅いでも頭が痛くなるような娘であつた。椎の若葉よりも葉越しの空の夕月を愛した。そういうことは彼女自身却つて若さに飽満していたためかも知れない。

店の代々の慣わしは、男は買出しや料理場を受持ち、嫁か娘が帳場を守ることになっている。そして自分は一人娘である以上、

いずれは平凡な媚むこを取つて、一生この餓鬼窟の女番人にならなければなるまい。それを忠実に勤めて来た母親の、家職のためあの無性格にまで晒されてしまった便たよりない様子、能の小こおもて面のように白さと鼠色の陰影だけの顔。やがて自分もそうなるのかと思うと、くめ子は身慄こぞいが出た。

くめ子は、女学校を出たのを機会に、家出同様にして、職業婦人の道を辿たどつた。彼女はその三年間、何をしたか、どういう生活をしたか一切語らなかつた。自宅へは寄寓のアパートから葉書ぐらいで文通していた。くめ子が自分で想い浮べるのは、三年の間、蝶々のように華やかな職場の上を閃ひらめいて飛んだり、男の友だちと蟻の挨拶のように触覚を触れ合ったりした、ただそれだけだ

った。それは夢のようでもあり、いつまで経っても同じ繰返しばかりで飽き飽きしても感じられた。

母親が病気で永い床に就き、親類に喚び戻されて家に帰って来た彼女は、誰の目にもただ育っただけで別に変ったところは見えなかった。母親が

「今まで、何をしておいでだった」

と訊くと、彼女は

「えへへん」と苦も無げに笑った。

その返事振りにはもうその先、挑みかかれない微風のような調子があった。また、それを押して訊き進むような母親でもなかった。

「おまえさん、あしたから、お帳場を頼みますよ」

と言われて、彼女はまた

「えへへん」と笑った。もつとも昔から、肉親同志で心情を打ち明けたり、真面目まじめな相談は何となく双方がテレてしまうような家の中の空気があった。

くめ子は、多少諦めのようなものが出来て、今度はあまり嫌がらないで帳場を勤め出した。

押し迫った暮近い日である。風が坂道の砂を吹き払って凍て乾いた土へ下駄げたの歯が無慈悲に突き当てる。その音が髪の毛の根元に一本ずつ響くといったような寒い晩になった。坂の上の交叉点

からの電車の軋きしる音が前の八幡宮の境内けいだいの木立のざわめく音と、風の工合ぐあいで混りながら耳元へ掴つかんで投げつけられるようにも、また、遠くで盲人つふやが呟つぶやいているようにも聞えたりした。もし坂道へ出て眺めたら、たぶん下町の灯は冬の海のいさり火のように明滅しているだろうとくめ子は思った。

客一人帰ったあとの座敷の中は、シャンデリアを包んで煮詰こつた物の匂いと煙草の煙りとが濛もう々もうとしている。小女と出前持の男は、鍋火鉢の残り火を石の炉ろに集めて、焙あつたている。くめ子は何となく心に浸み込むものがあるような晩なのを嫌に思い、努めて気が軽くなるようにフアツション雑誌や映画会社の宣伝雑誌の頁を繰っていた。店を看板にする十時までにはまだ一時間以上あ

る。もうたいして客も来まい。店を締めてしまおうかと思つていとところへ、年少の出前持が寒そうに帰つて来た。

「お嬢さん、裏の路地を通ると徳永が、また註文しましたぜ、御飯つきでどじよう汁一人前。どうしましょう」

退屈して事あれかしと待構えていた小女は顔を上げた。

「そうとう、ずうずう凶々しいわね。百円以上もカケをこしら拵えてさ。一文も払わずに、また——」

そして、これに対してお帳場はどういう態度を取るかと窓の中を覗いた。

「困つちまうねえ。でもおつかさんの時分から、言いなりに貸してやることにしているんだから、今日もまあ、持つてつておやり

よ」

すると炉に焙っていた年長の出前持が今夜に限って頭を擡もたげて言つた。

「そりやいけませんよお嬢さん。暮れですからこの辺で一度かたをつけなくちや。また来年も、ずるずるべつたりですぞ」

この年長の出前持は店の者の指導者格で、その意見は相当採上げてやらねばならなかつた。で、くめ子も「じゃ、ま、そうしよ」うということになつた。

茹ゆで出しうどんで狐南蛮を拵ええたものが料理場から井に盛られて、お夜食に店方の者に割り振られた。くめ子もその一つを受取つて、熱い湯気を吹いている。このお夜食を食べ終る頃、火の番

が廻つて来て、拍子木が表の薄硝子の障子に響けば看板、時間ま
えでも表戸を卸すことになっている。

そこへ、草履の音がぴたぴたと近づいて来て、表障子がしずか
に開いた。

徳永老人の髯の顔が覗く。

「今晚は、どうも寒いな」

店の者たちは知らん振りをする。老人はちよつとみんなの気配
を窺ったが、心配そうな、狡ずるそうな小声で

「あの——注文の——御飯つきのどじょう汁はまだで——」
と首を屈かがめて訊いた。

注文を引受けてきた出前持は、多少間の悪い面持で

「お気の毒さまですが、もう看板だったので」

と言いかけるのを、年長の出前持はぐつと睨にらめて顎さしずで指図さしずをする。

「正直なところを言つてやれよ」

そこで年少の出前持は何分にも、一回、僅かずつの金高が、積り積つて百円以上にもなつたからは、この際、若干でも入金して貰わないと店でも年末の決算に困ると説明した。

「それに、お帳場も先と違つて今はお嬢さんが取締とっているんですから」

すると老人は両手を神経質に擦り合せて

「はあ、そういうことになりましたすかな」

と小首を傾けていたが

「とにかく、ひどく寒い。一つ入れて頂きましようかな」

と言つて、表障子をがたがたいわして入つて来た。

小女は座布団を出してはやらないので、冷い籐畳の広いまん中にたった一人坐つた老人は寂しげに、そして審さばきを待つ罪人のように見えた。着膨れてはいるが、大きな体格はあまり丈夫ではないらしく、左の手を癖にして内懐へ入れ、肋ろつこつ骨の辺を押えている。純白になりかけの髪を総髪なに撫なでつけ、立派な目鼻立ちの、それがあまりに整い過ぎているので薄倅うすわいを想わせる顔付きの老人である。その儒者風な顔に引較べて、よれよれの角帯に前垂れを掛け、坐つた着物の裾から浅黄色あさぎの股引ももひきを覗かしている。コー

ルテンの黒足袋たびを穿はいているのまで釣合つひわない。

老人は娘のいる窓や店の者に向つて、始めのうちは頻しきりに世間の不況、自分の職業の彫金の需要せうぎやうされないことなどを鹿爪しかつめらしく述べ、従つて勘定も払えなかつた言訳を吃きつきつ々と述べる。だが、その言訳を強調するために自分の仕事の性質の奇稀性きせいせいに就つて話わす向けて来ると、老人は急に傲ごうぜん然ぜんとして熱を帯びて来る。

作者はこの老人が此夜このよに限らず時々得意とも慨嘆ともつかない気分きぶんの表象としてする仕方話のポーズぽーずを茲こゝに紹介する。

「わしのやる彫金は、ほかの彫金と違つて、片切彫かたぎりというのでな。一たい彫金ていこんというものは、金かねで金かねを截きる術じゆつで、なまやさしい芸げいではないな。精神の要るもので、毎日どじょうでも食たわにや全く続

くことではない」

老人もよく老名工などに有り勝ちな、語る目的より語るそのこととにわれを忘れて、どんな場合にでもエゴイスチックに一席の独演をする癖がある。老人が尚なほも自分のやる片切彫なほというものを説明するところを聞くと、元禄の名工、横谷宗よこや、珉そうみん、中興の芸であつて、剣道で言えば一本勝負であることを得意になつて言い出した。

老人は、左の手に鑿たがねを持ち右の手に槌つちを持つ形をした。体を定めて、鼻から深く息を吸い、下腹へ力を籠めた。それは単に仕方を示す真似事には過ぎないが、流石さすがにぴたりと形は決まつた。柔軟性はあるが押せども引けども壊れない自然の原則のようなもの

が形から感ぜられる。出前持も小女も老人の氣配いから引緊められるものがあつて、炉から身体を引起した。

老人は嚴かなその形を一度くずして、へへへと笑つた。

「普通の彫金なら、こんなにしても、また、こんなにしても、そりや小手先でも彫れるがな」

今度は、この老人は落語家でもあるように、ほんの二つの手首の捻^{ひね}り方と背の屈め方で、鑿と槌を繰る恰好のいぎたなさと浅間しさを誇張して相手に受取らせることに巧みであつた。出前持も小女もくすくすと笑つた。

「しかし、片切彫になりますと——」

老人は、再び前の堂々たる姿勢に戻つた。瞑目した眼を徐^{おもむ}ろに

開くと、青蓮華のような切れの鋭い眼から濃い瞳はしずかに、斜に注がれた。左の手をぴたりと一ところにとどめ、右の腕を肩の附根から一ぱいに伸して、伸びた腕をそのまま、肩の附根だけで動かして、右の上空より大きな弧を描いて、その槌の拳は、鑿の手の拳に打ち卸される。窓から覗いているくめ子は、嘗て学校で見た石膏模造の希臘彫刻の円盤投げの青年像が、その円盤をさし挟んだ右腕を人間の肉体機構の最極限の度にまでさし伸ばした、その若く引緊った美しい腕をちらりと思ひ泛べた。老人の打ち卸す発矢とした勢いには、破壊の憎みと創造の歓びとが一つになって絶叫しているようである。その速力には悪魔のものか善神のものか見判け難い人間離れのした性質がある。見るものに無限を感じ

じさせる天体の軌道のような弧線を描いて上下する老人の槌の手は、しかしながら、鑿の手にまで届こうとする一刹那せつなに、定まった距離でぴたりと止まる。そこに何か歯止機が在るようでもある。芸の躡しゅうけというものでもあろうか。老人はこれを五六遍繰返してから、体をほぐした。

「みなさん、お判りになりましたか」

と言う。「ですから、どじようでも食わにや遣やりきれんのですよ」

実はこの一くさりの老人の仕方は毎度のことである。これが始まると店の中であることも、東京の山の手であることもしばらく忘れて店の者は、快い危機と常規のある奔放の感触に心を奪われ

る。あらためて老人の顔を見る。だが老人の真摯しんしな話が結局どじようのことに落ちて来るのでどつと笑う。気まり悪くなったのを押し包んで老人は「また、この鑿の刃尖の使い方には陰と陽とあつてな——」と工人らしい自負の態度を取戻す。牡丹ぼたんは牡丹の妖艶ごうとうないのち、唐獅子の豪宕ごうとうないのちをこの二つの刃触りの使い方ごうとうで刻み出す技術の話にかかった。そして、この芸によつて生きたものを硬い板金の上へ産み出して来る過程の如何に味のあるものか、老人は身振りを増して、滴したたるものの甘さを啜すするとろりとした眼付きをして語った。それは工人自身だけの娛いんしみに淫いんしたものであつて、店の者はうんざりした。だがそういうことのあとで店の者はこの辺が切り上がらせどきと思つて

「じやまあ、今夜だけ届けます。帰って待つといでなさい」

と言つて老人を送り出してから表戸を卸す。

ある夜も、風の吹く晩であつた。夜番の拍子木が過ぎ、店の者は表戸を卸して湯に出かけた。そのあとを見済ましてもしたかのように、老人は、そつと潜り戸くぐを開けて入つて来た。

老人は娘のいる窓に向つて坐つた。広い座敷で窓一つに向つた老人の上にもしばらく、手持無沙汰な深夜の時が流れる。老人は今夜は決意に充ちた、しおしおとした表情になつた。

「若いうちから、このどじょうというものはわしの虫が好くのだつた。この身体のしんを使う仕事には始終、補いのつく食いものを摂らねば業が續かん。そのほかに、うらぶれて、この裏長屋

に住み付いてから二十年あまり、鰥夫やもめ暮しのどんな佗わびしいときでも、苦しいときでも、柳の葉に尾鰭おひれの生えたようなあの小魚は、妙にわしに食いもの以上の馴染なじみになつてしまつた」

老人は搔かき口説くどくようにいろいろのことを前後なく喋り出した。人に嫉ねたまれ、蔑まれて、心が魔王のように猛り立つときでも、あの小魚を口に含んで、前歯でぽきりぽきりと、頭から骨ごとにならずつ噛み潰して行くと、恨みはそこへ移つて、どこともなくやさしい涙が湧いて来ることも言つた。

「食われる小魚も可哀そうになれば、食うわしも可哀そうだ。誰も彼もいじらしい。ただ、それだけだ。女房はたいして欲しくもない。だが、いたいけなものは欲しい。いたいけなものが欲しいと

きもあの小魚の姿を見ると、どうやら切ない心も止まる」

老人は遂ついにに懐からタオルのハンケチを取出して鼻を吸った。

「娘のあなたを前にしてこんなことを言うのは宛てつけがましくはあるが」と前置きして「こちらのおかみさんは物の判った方でした。以前にもわしが勘定の滞とどこおりに気を詰らせ、おずおず夜、遅く、このようにして度び度び言い訳に來ました。すると、おかみさんは、ちょうどあなたのいられるその帳場に大儀そうに頼杖ついでいられたが、少し窓の方へ顔を覗かせて言われました。徳永さん、どじょうが欲しかったら、いくらでもあげますよ。決して心配なさるな。その代り、おまえさんが、一心うち込んでこれぞと思つた品が出来たら勘定の代りなり、またわたしから代金を取

るなりしてわたしにお呉れ。それでいいのだよ。ほんとにそれでいいのだよと、繰返して言つて下さつた」老人はまた鼻を噉つた。「おかみさんはそのときまだ若かつた。早く婿取りされて、ちやうど、あなたぐらいな年頃だつた。気の毒に、その婿は放蕩者で家を外に四谷、赤坂と浮名を流して廻つた。おかみさんは、それをじつと堪え、その帳場から一足も動きなさらんかつた。たまには、人に縫すがりつきたい切ない限りの様子も窓越しに見えました。そりやそうでしょう。人間は生身ですから、そうむざむざ冷たい石になることも難かしい」

徳永もその時分は若かつた。若いおかみさんが、生理めになつて行くのを見兼ねた。正直のところ、窓の外へ強引に連れ出そう

かと思つたことも一度ならずあつた。それと反対に、こんな半木ミ乃伊イラのような女に引つかかつて、自分の身をどうするのだ。そう思つて逃げ出しかけたことも度々あつた。だが、おかみさんの顔をつくづく見るとどちらの力も失せた。おかみさんの顔は言つていた——自分がもし過あやまちでも仕出かしたら、報いても報いても取返しのつかない悔いがこの家から永遠に課されるだろう、もしまた、世の中に誰一人、自分に慰め手が無くなつたら自分はすぐ灰のように崩れ倒れるであろう——

「せめて、いのちの息吹きを、回春の力を、わしはわしの芸によつて、この窓から、だんだん化石して行くおかみさんに差入れたいと思つた。わしはわしの身のしんを揺り動かして鑿と槌を打ち

込んだ。それには片切彫にしくものはない」

おかみさんを慰めたさもあつて骨折るうちに知らず知らず徳永は明治の名匠加納夏雄以来の伎倆を鍛えたと言つた。

だが、いのちが刻み出たほどの作は、そう数多く出来るものではない。徳永は百に一つをおかみさんに献じて、これに次ぐ七八を売つて生活の資にした。あとの残りは氣に入らないといつて彫りかけの材料をみな鑄直した。「おかみさんは、わしが差上げた簪かんざしを頭に挿したり、抜いて眺めたりされた。そのときは生々しく見えた」だが徳永は永遠に隠れた名工である。それは仕方がないとしても、歳月は酷むごいものである。

「はじめは高島田にも挿せるような大平打の銀簪にやなぎ桜と彫

つたものが、丸鬚用の玉かんざしのまわりに夏菊、ほととぎすを彫るようになり、細づくりの耳搔きかんざしに糸菘、おみなえし女郎花を毛彫りで彫るようになっては、もうたいして彫るせきもなく、一番しまいに彫って差上げたのは二三年まえの古風な一本足のかんざしの頸に友呼ぶ千鳥一羽のものだった。もう全く彫るせきは無い」

こう言つて徳永は全くくたたりとなつた。そして「実を申すと、勘定をお払いする目当てはわしにもうありませんのです。身体も弱りました。仕事の張気も失せました。永いこともないおかみさんは簪はもう要らんでしようし。ただただ永年夜食として食べ慣れたどぜう汁と飯一碗、わしはこれを摂らんと冬のひと夜を凌しのぎ

兼ねます。朝までに身体が凍え痺れる。わしら彫金師は、一たがね一期いちごしです。明日のことは考えんです。あなたが、おかみさんの娘ですなら、今夜も、あの細い小魚を五六ぴき恵んで頂きたい。死ぬにしてもこんな霜枯れた夜は嫌です。今夜、一夜は、あの小魚のいのちをぽちりぽちりわしの骨の髄に噛み込んで生き伸びたい——」

徳永が嘆願する様子は、アラブ族が落日に対して拝するよう
心もち顔を天井に向け、こまいぬ 狢犬のようにうづくま 蹲り、哀訴の声を呪文の
ように唱えた。

くめ子は、われとしもなく帳場を立上った。妙なものに酔わされた気持でふらりふらり料理場に向った。料理人は引上げて誰も

いなかつた。生洲いけすに落ちる水の滴りだけが聴える。

くめ子は、一つだけ捻ひねつてある電燈の下を見廻すと、大鉢ふたに蓋ふたがしてある。蓋を取ると明日の仕込みにどじようは生酒に漬けてある。まだ、よろりよろり液体の表面へ頭を突き上げているものがある。日頃は見るも嫌だと思つたこの小魚が今は親しみ易いものに見える。くめ子は、小麦色の腕まを捲まくつて、一ぴき二ひきと、柄鍋の中へ移す。握つた指の中で小魚はたまさか蠢うごめく。すると、その顛せんどう動が電波のように心に伝わつて刹那せつなに不思議な意味ほのが仄ほのかに囁ささやかれる——いのちの呼応。

くめ子は柄鍋に出汁だしと味噌汁とを注いで、ささがし牛蒡ごぼうを抓つまみ入れる。瓦斯ガスこんろで掻かき立てた。くめ子は小魚が白い腹を浮か

して熱く出来上った汁を朱塗の大椀に盛った。山椒さんしょう一つまみ蓋の把手とってに乗せて、飯櫃めしびつと一緒に窓から差し出した。

「御飯はいくらか冷たいかも知れないわよ」

老人は見栄も外聞もない悦び方で、コールテンの足袋の裏を弾ね上げて受取り、仕出しの岡持おかもちを借りて大事に中へ入れると、潜り戸を開けて盗人のように姿を消した。

不治の癌がんだと宣告されてから却かえつて長い病床の母親は急に機嫌よくなつた。やっと自儘じままに出来る身体になれたと言つた。早春の日向ひなたに床をひかせて起上り、食べ度いと思うものをあれやこれや食べながら、くめ子に向つて生涯に珍らしく親身な調子で言つた。

「妙だね、この家は、おかみさんになるものは代々亭主に放蕩されるんだがね。あたしのお母さんも、それからお祖母さんもさ。恥かきつちやないよ。だが、そこをじつと辛抱してお帳場に嘯かじりついていると、どうにか暖簾のれんもかけ続けて行けるし、それとまた妙なもので、誰か、いのちを籠めて慰めて呉れるものが出来るんだね。お母さんにもそれがあつたし、お祖母さんにもそれがあつた。だから、おまえにも言つとくよ。おまえにも若もしそんなことがあつても決して落胆おしでないよ。今から言つとくが——」

母親は、死ぬ間際に顔が汚ないと言つて、お白粉しろいなどで薄く刷き、戸棚の中から琴柱ことじの箱を持って来させて

「これだけがほんとに私が貰つたものだよ」

そして箱を頬に宛てがい、さも懐かしそうに二つ三つ揺る。中で徳永の命をこめて彫ったという沢山の金銀簪かんざしの音がする。その音を聞いて母親は「ほ　ほ　ほ　ほ」と含み笑いの声を立てた。それは無垢むくに近い娘の声であった。

宿命に忍従しようとする不安で逞しい勇氣と、救いを信ずる寂しく敬虔な気持とが、その後のくめ子の胸の中を朝夕に纏もつれ合う。それがあまりに息詰まるほど嵩たかまると彼女はその嵩かさを心から離して感情の技巧の手先で犬のように綾なしながら、うつらうつら若さをおもう。ときどきは誘われるまま、常連の学生たちと、日の丸行進曲を口笛で吹きつれて坂道の上まで歩き出てみる。谷を越

した都の空には霞が低くかかっている。

くめ子はそこで学生が呉れるドロップを含みながら、もし、この青年たちの中で自分に関りのあるものが出るようだったら、誰が自分を悩ます放蕩者の良人になり、誰が懸命の救い手になるかなどと、ありのすさびの推量ごとをしてやや興を覚える。だが、しばらくすると

「店が忙しいから」

と言って袖で胸を抱いて一人で店へ帰る。窓の中に坐る。

徳永老人はだんだん瘠せ枯れながら、毎晩必死とどじょう汗をせがみに来る。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

初出：「新潮」

1939（昭和14）年1月号

入力：鈴木厚司

校正：渥美浩子

1999年12月26日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

家霊

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>